

全訳注

土佐日記

品川和子

品川和子（しながわ かずこ）

1916年生れ。1959年昭和女子大学文家政学部
日本文学科卒業。国文学（中古）専攻。昭和
女子大学助教授（文学部）。著書『平安朝服飾
百科辞典』（共著）。主要論文「蜻蛉日記と漢
詩文の関係について」「歌人道綱母について」



定価 780 円

土佐日記

品川和子

昭和58年 6 月10日 第1刷発行

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽 2-12-21 〒112

電話・東京(03)945-1111(大代表)

振替・東京 8-3930

装 幀 蟹江征治

レイアウト 志賀紀子

印 刷 株式会社廣済堂

製 本 加藤製本株式会社

© Kazuko Shinagawa 1983

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送り
ください。送料小社負担にてお取替えます。

ISBN 4-06-158605-X(0)

(術E)

土佐日記

全訳注 品川和子

講談社学術文庫

まえがき

土讃線が開通して、土佐の国すなわち高知県へゆく旅は、たいへん容易になった。それ以前は、瀬戸内海から大洋へ出て、阿南の海岸の沖を南下し、波高き「おはな」すなわち室戸岬をめぐる、今度は北上して高知までゆく——この海の旅はなかなか難儀であつたのである。

今を去ること一千五十年のむかし、前土佐守紀貫之が、任満ちて、帰京の途に着いたのは、朱雀天皇の承平四年（九三四）の年の瀬もおし迫つた十二月二十一日（陰暦）のことであつた。じつさいに大津の泊りを解纜したのは二十七日であつて、それから四十七日の間、一行は船中であつて徹底した忍耐・耐乏の生活を余儀なくさせられたのである。

簡素な文体と、ところどころに出てくる古今調の和歌で形成されている、この『土佐日記』という文学作品——それは歌人紀貫之がこの「旅」の体験を通して、日本の文学史のうえに新しい日記文学の道を開拓するものだったのである。

古代を仰ぎ中国へ注ぐ熱いひとみの彼の眼識の底には、和歌から散文へ、漢文から和文へという、新しいジャンルの設定にいとむ「時代の児」紀貫之の千歳不拔の見識が蔵されていたと、今日からはいふことができるであらう。

『土佐日記』は、日記文学として近世以来多くの学者が手をつけてきた作品であり、ことに土佐国の部分については、郷土史研究家の熱心な探求の手がさし伸べられてきた。さらに、昭和に入って池田亀鑑先生が、たまたま神田の古本屋の店頭で手にされた一冊、青谿書屋本の発見は、作者紀貫之によつて一千年前に書かれたほとんどそのままの形を、現代の私どもに示してくれるという奇蹟的な恩恵をもたらしたのである。そして、これらにもとづくその後の研究者の新しい研究業績は枚挙にいとまがないほどであつて、これらの貴重な学恩を享受しつつ、私はこの『土佐日記へ全訳注』の筆を執らしていただいたわけである。

昭和五十七年十二月二十一日

品川和子

目次

まえがき.....3

凡例.....8

(承平四年―九三五―十二月)

一 男もすなる日記といふものを.....13

二 廿二日に.....23

三 廿七日大津より浦戸を指して.....34

四 廿八日浦戸より漕ぎ出でて.....48

(承平五年―九三六―一月)

五 元日ごんいちなほ同じ泊とまりなり.....54

六 七日になりぬ.....63

七	かくて、この間にこと多かり……………	70
八	八日さほることありて……………	80
九	九日のつとめて……………	86
一〇	かくて宇多の松原を行き過ぐ……………	92
二	十日、今日はこの奈半の泊に……………	103
三	十二日、雨降らず……………	111
三	十五日、今日小豆粥煮ず……………	120
四	十七日、曇れる雲なくなりて……………	125
五	十八日、なほ同じところにある……………	132
六	廿日、昨日のやうなれば……………	139
七	廿一日、卯の刻ばかりに……………	153
八	廿二日、昨夜の泊より……………	162
九	廿六日、まことにやあらむ……………	169
一〇	廿九日、船出してゆく……………	180
(承平五年―九三六―二月)		
三	二月一日、朝の間、雨降る……………	192

三 四日、楫取「今日風雲のけしきはなはだ悪し」

といひて

三 五日、今日辛くして和泉の灘より

四 かくいひて眺めつつ来る間に

五 六日、落標の下より出でて

六 八日、なほ、川上りになづみて

七 九日、心もとなさに

八 十日、障ることありて

九 十六日、今日のようにさつかた

三〇 夜更けて来れば

地 図

解 説

主要参考文献

『土佐日記』旅程表

282

298 295 284 283

273 261 253 243 240 231 224 212 203

凡例

一、本書は現在最善本とされている青谿書屋本『土左日記』を底本とした。

一、藤原定家筆写本・日本大学図書館本・宮内庁書陵部本・近衛家本・三条西家本を参照し、明らかに底本の誤脱と認められる箇所は訂正した。

一、底本の本文を改めた所はそれぞれの箇所においてその事実を述べた。

一、本文は読解の便宜のために左のような処置をした。

1、適当に仮名に漢字を宛て、仮名づかいは歴史的仮名づかいにした。

2、濁点・句読点を加えた。

3、本文は三十の段落に区切り、段落ごとに頭初の句をとって見出しとした。そして、
 〈現代語訳〉〈注〉〈参考〉を付した。

4、漢字の旧字体は常用漢字にあるものはそれに改め、読みにくい漢字にはふり仮名をつけた。

5、助動詞の「ん」「けん」「らん」などはそれぞれ「む」「けむ」「らむ」に統一した。

6、会話や心中思惟には「」をつけ、会話は改行とした。

一、〈現代語訳〉は、原文に忠実であるとともに、独立した現代文として味わい得るようつ

とめた。

一、〈注〉の執筆に当っては、近世から現代までの諸注をひろく参照した。

一、〈参考〉は、地理的方面においては、竹村義一氏の『土佐日記の地理的研究 土佐国篇』と萩谷朴氏の『土佐日記全注釈』によるところが多い。

一、解説は、この作品の特色と作者について述べ、読者の利便をはかった。

土佐日記

一 男もすなる日記といふものを

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。

その年の、しはすの、二十日あまり一日の日の、戌の刻に門出す。その由いささかにものに書きつく。

ある人、県の四年・五年果てて、例のことどもみなし終へて、解由などとりて、住む館より出でて、船に乗るべき所へわたる。かれこれ、知る知らぬ、送りす。年頃よくくらべつる人々なむ、別れ難く思ひて、日しきりにとかくしつつ、ののしるうちに夜更けぬ。

〈現代語訳〉

男性も書くとい聞いている日記というものを女性のわたしもしてみようと思つて書くのです。某年の十二月の二十一日めの日の、午後八時ごろ門出をします。そのあたりのことどもをすこしばかり、ものに書きつけます。

ある人が国司としての四、五年の任期を終えて、いつもの決まりである事務引継ぎなども

全部済ませて、解由^{げゆう}状^{じやう}などを（新任の国司から）受けとつて、今まで住んでいた国司館^{ぐにかた}を出発して、乗船する予定の場所へ渡ります。あの人、この人、知っている者も、知らない者も見送りをします。年来^{なふら}、心から深く親しみ合つた人々が、別れを辛^{つら}く思つて、一日じゅう、あれこれなにかと世話を焼いては大さわざしているうちに夜も更けました。

へ注

○男^{をとこ}もすなる日記といふもの 男性である官僚^{くわんりやう}が漢文で日記を書きしるすということとは、当時の常識である。そのことを女性の立場で平易に、このようにいったのである。「す」は行なう。する。「なる」は伝聞の助動詞「なり」の連体形。

○女^{をんな}もしてみむとて 男性の日記は漢字漢文で公のを中心にするのであるが、その男文字といわれる漢字に対して、「女文字である草仮名^{そうがな}を用いて、和文で日記を書いてみよう」という意味。作者紀貫之^{きくわんし}は自身を女性に仮託したのである。題材は公務^{こうむ}をはなれてきわめて自由。これまでの日記がもつていた記録性^{きこくせい}を超えた、あらたな日記文学の誕生^{たうじん}をこの一行は宣言している。「するなり」の「なり」は断定の助動詞。

○それのとし ある年。じつは承平四年（九三四）。○しはす 師走。陰曆十二月の異名。

○二十日^{はつか}あまり一日^{ひとひ}の日の 二十一日めの日の。○戌^{いぬ}の刻^{とき} 戌^{いぬ}の刻^{とき}。後世^{こうせ}の初更^{はつこう}、すなわち、六ツ半から五ツ半。現在の午後七時過ぎから同じく九時ぐらいにあたる。一刻は約二時間。

○門出^{かどで} ここではたんに「出立^{しゅつたつ}」の意にも解せる。「門出」についての説明は（参考）にゆ

ずる。

○ある人 紀貫之自身のこと。「その年」といい、「ある人」といい、故意にぼかしている。
 ○県の四年、五年 国司として勤務した四、五年。貫之は延長八年（九三〇）から承平四年まで、土佐守として任地にあった。「県」はここでは地方官の任国をさしている語。○例のことども 国司更迭のさい、新旧の国司の間で、かならずすることに定まっている事務引継ぎの諸事項。○解由「解由状」のこと。新旧の事務の引継ぎによつて、新任者が前任者にわたす確認状。前任者は上京後、この解由状を勘解由使庁に提出してはじめて任を解かれるわけである。

○住む館 国司館。高知県南国市（旧、長岡郡国府村）比江。高知市の東方八キロばかりの地点にあり、田圃の中に遺跡がある。○船に乗るべき所へわたる「船に乗るべき所」は二十七日の記事により、長岡郡大津ということと判るが、そのはつきりした地点については現在未詳。三の「へ注」参照。「わたる」はある地点から別の地点へ移ることをいうが、とくに河川や海をわたるのに用いることが多い。これも国分川を舟で下ったものとみられる。

○年ごろよくくらべつる人々 年来よく心を通わして深交のあった人々。「くらぶ」は比較することであるが、ここでは「自分の心を相手の心に比べてそれが一致し、信じ合うこと」の意。多く「くらべ難し」「くらべ苦し」「くらべ侘ぶ」など複合語として用いられた。「例のくらべ苦しき御心。いにしへの有様なごりなし、と世人も言ふなるものを」（『源氏物語』松風）。